



伊藤 伸一（いとう しんいち）
1956年8月生まれ、60歳。83年、愛知医科大学卒業、88年、奈良県立医科大学大学院修了。90年、医療法人大雄会副理事長、93年、同理事長となり、2012年、社会医療法人に認定されて現職に。03年、学校法人研伸学園理事長、15年、大雄会第一病院院長。ほかに愛知県放射線科医会会長、日本社会医療法人協議会副会長などの要職も務める。日本人間ドック学会専門医、認定医、医学博士。

九〇年以上の歴史を持ち、尾張西部を中心に地域医療の一大拠点病院として貢献を続ける社会医療法人「大雄会」（愛知県一宮市）。病院、クリニック、老人保健施設など一〇の医療機関と介護施設・サービスを運営する一方で、医療の質向上を目指して設立した看護師養成機関が発展を続け、学校法人として独立した短期大学が四月には四年制大学として新たなスタートを切る。創立から一世紀越えを控えて、良質で先進的な医療に挑み続けた源流、地域医療のあり方などを伊藤伸一理事長に聞いた。

——原点は九三年前に開設された医院。日本医療機関の歴史としても注目されます。

伊藤 一九二四年に私の祖父が開業した小さな医院が最初です。研究者肌の人で、医師としての診療とともに、地域医療の充実のため、世界最先端医療による治療の推進に力を入れてきたのは事実ですね。その発展した形として今の

大雄会があると思っています。

——尾張西部地域における医療の特徴、今後の展望は。

伊藤 進行する高齢社会への課題は、どこでも同じですが、介護による医療支援とリハビリなど患者さまが病院から出て、自宅に戻るまでの期間滞在する回復期の病棟が少ないのが、この地域の特徴だと思っています。機能回復に焦点を当てた医療の充実が課題になってくると思います。

——昨年、ミャンマーでの診療を開始しました。国際協力は。

伊藤 二〇年ほど前から医療機器等の寄贈に始まり、大雄会医師による現地指導や放射線科医師の研修受け入れなど長年の継続した医療支援を経て、現地で日本人医師・看護師が常駐する診療をスタートするに至りました。日本の優れた医療の品質とシステムは世界で誇れるものであり、アジアで広めていくことができればいいと思っています。

——ありがとうございます。

地域医療100年へ

思いやり、患者に寄り添う心 救急救命で住民の安心支える

——長い歴史の中で特筆すべき取り組みは。

伊藤 医院を開設してまだ五年目の二九年に国産第一号のレントゲン『比叡号』を全国で初めて導入しました。当時大学病院にもなかった時代に、原書を紐解くなどして目に見えない肺の中や骨折などの診断における科学的有用性を認めていたようです。がん治療がまだ研究途上にあつた五六年には放射線治療のためのコバルト診療装置を設置。がんの手術後腎不全になる患者さまが目立ったため、先駆的なアメリカの人工腎臓の医療現場を視察して七〇年には人工透析装置を二台入れました。小さな病院にしては驚くほど早い時期の導入でした。医療の質を高め、人の命をどう救っていくのかということに力を注ぐのが大雄会の原点と言えるでしょう。

——翌年の七一年には一宮高等看護学院を大雄会が開設しています。

伊藤 医療機器だけでなくソフト面での取り組みで特徴的なのが正看護師の育成です。当時大雄会

は二〇〇床ほどの中小病院でしたが、病院の中で患者さまと直接、最も長く接している看護師の質を高めたい、というのが先人の思いでした。看護師が病院の質を決める、人が人をケアするという医療の本質を実現していく方向性は正しかったと思います。

——病院併設の看護専門学校は二〇〇五年に閉校。前年の〇四年からは大雄会の法人から独立して地域の医療人材を育てる学校法人研伸学園愛知きわみ看護短期大学を設立し、今年四月には四年制の一宮研伸大学（看護学部八〇人）が開学します。

伊藤 大雄会は学校法人を支援していく立場ですが、技術とともに人間性や教養を身に付けた、よい質の高い看護で地域、ひいては日本の医療に貢献する大学になってほしいですね。

——「人類を救う」を使命に、思いやりの心、患者中心の良質な医療の提供を基本理念にしています。具体的にどう実践していますか。

伊藤 使命は病気で苦しむ人に

寄り添って、幸せになってほしいという思いを掲げたものです。歴史に恥じないよう最先端医療を取り入れつつ、地域の救急医療の充実に努めているのもその一つの対応ですね。三次救急（二四時間三六五日救急受入）を担う救命救急センターでは、救急の専門医を常駐させ、月間三百数十人の救急搬送患者さまを診ています。他にも脳卒中センターには脳神経外科医が、また集中治療専門医、麻酔科医、産科医も常駐して二四時間三六五日体制で対応しています。地域の方々に安心してもらうために何が必要かを常に考え、全力で取り組んでいます。

——医療体制の充実、課題について考えを。

伊藤 四五四床の大雄会全体では常勤医師が約一二〇人、看護師・看護助手が約六七〇人、コメディカル約三二〇人、事務職員約二二〇人。医療は専門が細分化してきており、対応できる医師の充実はしていきたいと考えています。日本の医療は大変革期に入っており、経営は厳しいですが、ま